

ニュース

学会等の開催 (6～9月)

第7回国際蜂療大会

6月28～30日に中国四川省の成都市および樂山市で第7回国際蜂療大会が中韓日3か国を中心とした参加者を集めて開催された。当施設から中村助教授が参加。本号に参加記を掲載した (pp.142-143)。

第22回国際昆虫学会

8月15～21日にオーストラリア・ブリスベン市で第22回国際昆虫学会が開催された。幅広く昆虫学関連全分野をカバーする最大の学会で、日本からも多数の研究者が参加し、当施設からは、佐々木、吉田、新島の各教授、小野助教授が参加した。次号に概要の報告を予定。

日本食品科学工学会 51 回大会

9月2～4日に盛岡市の岩手大学で日本食品科学工学会 51 回大会が開催された。ミツバチ生産物関連では、ハチミツ中の異性化糖検出に関する報告、2報のローヤルゼリーに関する研究報告があった。

第8回熱帯養蜂会議

9月6～10日にブラジル・リベロンプレト市で第8回国際ミツバチ研究協会 (IBRA) 熱帯養蜂会議が開催された。当施設からは松香教授が参加した。次号に概要の報告を予定。

第2回日本アピセラピー協会研修会

9月26日～28に成田市で標記の会が日本アピセラピー協会と日本蜂針療法療術師会との共催で、国外参加者も含めた国際研修会として開催された。開会式では、太田直樹会長の挨拶に続き、ドイツ・アピセラピー協会のスタンガシュー会長が来賓として挨拶 (後日講演もあり)。当施設の中村助教授も記念講演を行った。



スピーチをするスタンガシュー会長

世界の蜂の企画展

千葉県立中央博物館 (千葉市) で7月3日～8月31日の約2か月間にわたって「あっ！ハチがいる！ー世界のハチとハチの巣とハチの生活ー」が開催された。ミツバチをはじめ、多種多様な蜂が展示され、また7回の講演会、その他いべんとも併催し、夏休み期間で多数の入場者を集めた。なお、展示解説書として、展示テーマを表題とした同博物館監修の書籍 (144ページ) が刊行された。アジア養蜂研究協会でも頒価 1,600円 (送料別) で取り扱っている。

編集後記 猛暑と台風がキーワードであったこの夏、各地でスズメバチが猛威をふるったり、ツキノワグマの被害が多かったりで、ミツバチにも受難の夏になった。福島県の業者の製品中からアピテンが検出され、自主回収となったが、今後の自主的な生産・原料・製品管理に対する新たな取り組みについては日蜂通信でも好意的に評価されていた。相変わらずハチミツに関しては好意的に扱うマスコミの取材も多いだけに、安全性や高品質を目指す先手先手の対応姿勢は、これから消費者にも高く評価されるようになるだろう。

さて、今号の松浦先生の連載はマルハナバチ編。ミツバチやスズメバチの陰で目立たないが、思ったよりも世間を騒がしているようだ。生産物関連では、プロポリスによる癌転移抑制、プロポリス中の鉛の残留、花粉の抗酸化性、蜂の子の栄養、ハチミツに対する消費者の意識など、角度の異なる立場から寄稿していた。来年8月にアイルランドで開催される Apimondia の開催概要も掲載した。大規模養蜂家は少ないが、庭先養蜂の歴史は5000年あるという。ミツバチとともに暮らすのがどんな雰囲気か見てみたい。(純)